

青木家所蔵雅楽譜について

江崎 靖隆（糸島市教育委員会文化課）

1. はじめに

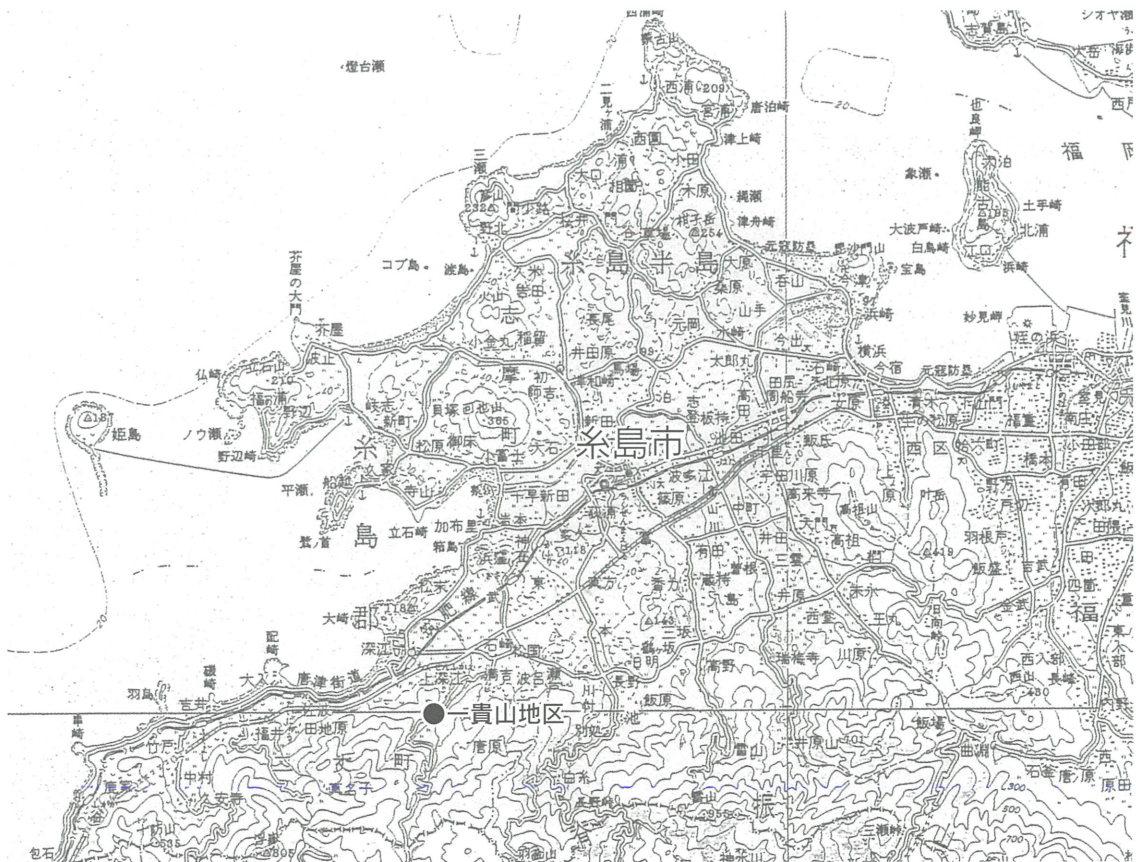
糸島市二丈一貴山地区は、脊振山系の二丈岳を霊山として、中近世における山岳寺院の痕跡をとどめ、宗教的景観を残す地域である。今年度、この一貴山地区にある青木家が所蔵する古文書について再整理を行ったところ、新たに系図の紙背に雅楽譜が記載されていることが明らかとなり、追加調査を行うこととなった。その結果、中世に属する龍笛譜であり、その希少な価値と共に糸島地域における中世雅楽の様相を知る上で、重要な資料であることが判明したため、本資料を含む青木家伝来の古文書類を、「青木家文書」として、平成25年5月31日付で糸島市指定文化財（市指

定有形文化財第3号）として指定した。

本稿では、この一連の調査成果のうち、龍笛譜について報告することで、今後の雅楽研究や本資料の活用等の一助としたい。

2. 一貴山夷巍寺について

二丈岳の山麓にかつて存在した一貴山夷巍寺は、清賀上人による奈良時代創建の伝承を持つ怡土郡七ヶ寺の一つとされている。雅楽譜を所蔵する青木家は、一貴山夷巍寺の属坊の一つであり、寂光坊と称される。これらの諸坊では、現在でも智者大師に対する報恩謝徳の勤修である天台大師講が行われている。また、夷巍寺関連遺構の一つ



第1図 糸島市二丈一貴山地区位置図 (1/200,000)

である無量院跡に安置される千手観音立像（江戸時代中期）の台座に書かれた墨書によると、近世前期、慶安年間に天台宗の寺院として再興された名島弁財天社の僧である常照坊快順が入寺しており、一貴山夷巍寺は、古くから天台寺院としての基盤があることを示している（末吉2008）。

この集落の総合調査は、平成19年8月に旧二丈町教育委員会と福岡大学人文学部歴史学科・文化学科との共同で行われており、その調査成果は、『夷巍寺八坊と天台大師講』（二丈町民俗文化財調査報告書第6集 2008）として刊行されている。その調査では、板碑や五輪塔、宝篋印塔が14世紀中頃～16世紀、仁王門の金剛力士像や天台大師像絵図が15世紀～16世紀のもので、室町時代を中心としていることから、当該期に、神仏習合しながらも天台寺院として最盛期を迎えたものと考えられる（桃崎2008）。

寂光坊が、この最盛期に存在したかどうかは不明であるが、信者の存在こそが寺院の存続基盤であり、一貴山夷巍寺周辺に多数の坊を従えていたものと思われる。

3. 青木家所蔵龍笛譜について

龍笛譜は、青木家所蔵文書の内、（高階（留守）氏カ）系図（青木家文書第3号）の紙背に描かれている。不要となった龍笛譜を系図として再び繋ぎ合せて再利用したもので、紙の継目に花押がある。このため、楽譜が最初から最後まで残っている曲と楽譜が一部しか残っていない曲が存在している。

（1）寸法

前述したように、龍笛譜は個々の断片が別個に貼り合わされ、裏面を系図として再利用している。系図は九枚継の継紙で、現状は、一部の継目が剥がれて残存する。このうち、系図第一紙から第六紙の紙背に龍笛譜が確認できる。第七紙から第九紙とは紙の質が異なる。なお、第九紙にも紙背文書が確認でき、永正18年（1521年）浜崎に漂着したクジラに関する記事のある覚が記載されている。この覚は地頭と弁差使の相論、クジラの2/3を「上」に上納し、1/3を浜崎、福井、吉井の各村で分配したことなどが記され、中世後期において、糸島と唐津の村落に繋がりがいることが分かる資料ではあるが、本稿では第一紙から第六紙紙

背の楽譜に限定して取り扱うこととする。

龍笛の楽譜が記載されている部分は、現状では3片に剥離しており、これを仮に龍笛譜①～③とする。その上で、それぞれの寸法および系図との関係を示すと以下のとおりである。

龍笛譜①：紙長62.7cm、紙幅15.0cm

系図第六紙の紙背

龍笛譜②：紙長94.6cm、紙幅15.0cm

系図第五・四・三紙の紙背

龍笛譜③：紙長77.4cm、紙幅15.0cm

系図第二紙・第一紙の紙背

本龍笛譜には、一定の間隔（6行分、約13cm）ごとに強い折目があり、元は折本であったと考えられる。また、紙幅も懷中に適した幅であり、研究譜ではなく、実用的に使用された楽譜と考えられる。紙は、厚めの質の良い紙を使用しており、記された文字については、表側にあたる系図の文字とは明らかに異なる。

（2）曲目

次に、龍笛譜①～③に記載されている曲名を以下に挙げる。

龍笛譜①

1. 賀殿急（かてんのきゅう）

双調

春鶯囀の前行に書かれた楽譜で、紙の繋ぎ目部分に残る1行。

2. 春鶯囀（しゅんのうでん）颯踏

双調 拍子十六 一部

7行分まで残存。半帖の記載あり。

龍笛譜②

3. 蘇合香（そこう）序

盤渉調 拍子十二 一部

14行分まで残存。序の前文に「比時必万（可）次六音也」蘇合香の唐急について述べたものか。

4. 酒胡子（しゅこし）

双調 拍子十二 一部

曲末部分のみ残存。3行分。

5. 武徳楽（ぶとくらく）

双調 拍子十 完譜

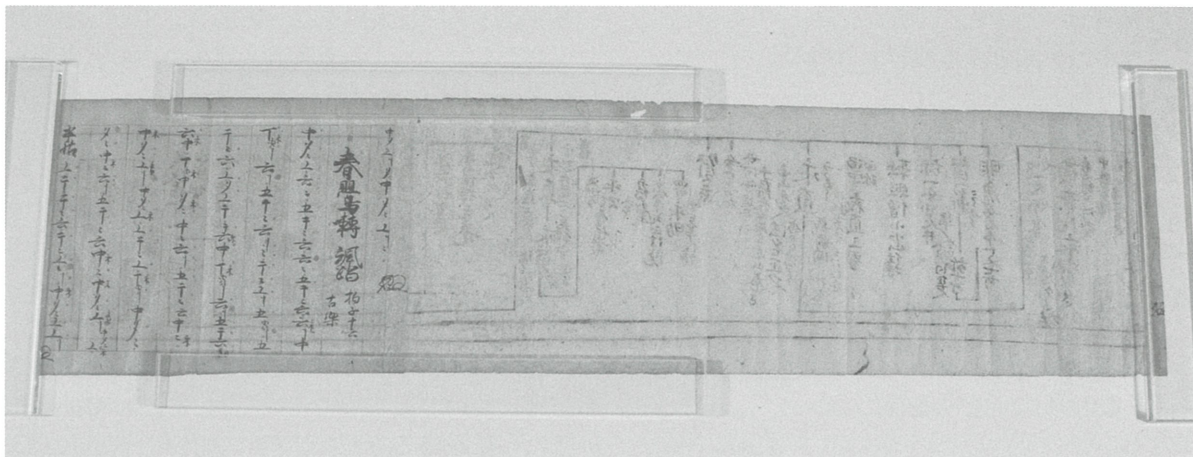


写真1 青木家所蔵龍笛譜①

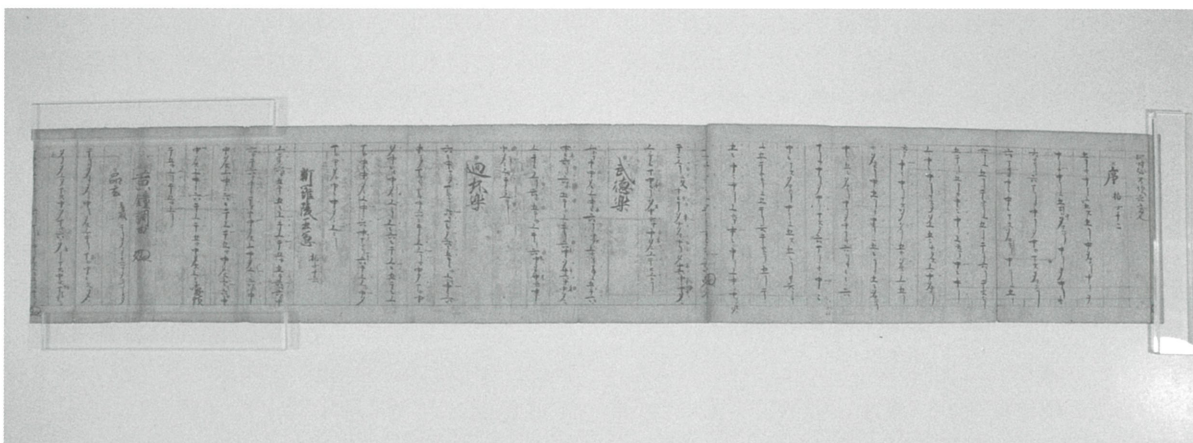


写真2 青木家所蔵龍笛譜②

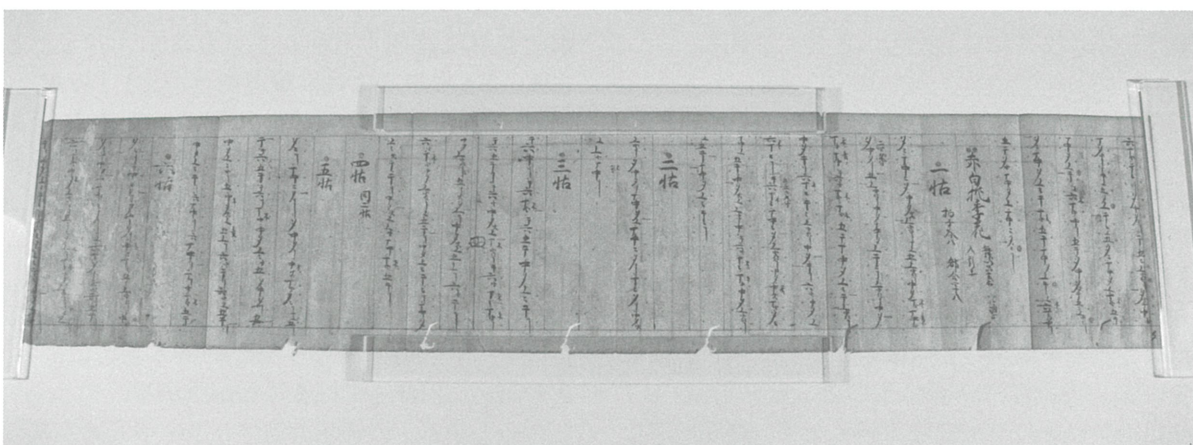


写真3 青木家所蔵龍笛譜③

6. 廻杯楽 (かいばいらく)

双調 拍子十六 完譜

7. 新羅陵王 (しんらりょうおう) 急

双調 拍子十六 完譜

8. 品玄 (ほんげん)

黄鐘調 (登場) 一部

3行分残存。3行目の譜字に切れている部分がある。

龍笛譜③

9. 喜春楽 (きしゅんらく) 破

黄鐘調 拍子七 一部

曲の後半部分のみ残存。5行分。

10. 赤白桃李花 (せきはくとうりか)

黄鐘調 各拍子八 一部

- ・一帖 (完譜)
- ・二帖 (完譜)
- ・三帖 (完譜)
- ・四帖 (完譜)
- ・五帖 (完譜)
- ・六帖 (一部)

六帖は4行目まで残存。

以上、本資料に記載が確認できる曲は、全10曲分であり、音階は双調、盤渉調および黄鐘調の曲で構成されている。その内、完全に譜が残るのは、武徳楽、廻杯楽、新羅陵王急の3曲で、いずれも双調である。

このほか、この龍笛譜には、別に江戸期の写しが1点存在している (青木家文書第4号)。この写しは、系図側と紙背側ともに作成されている点特徴的であるが、記載された情報をそのまま機械的に写したもので、原本にあたる資料の字配りや行などは基本的に反映されていないなど、写しとしての再現性は低い。また、龍笛譜の面については、譜字の横に記載される朱点をまったく写していないなど、この写しを行った人物は、雅楽の知識が無いままに写したものと考えられる。

(3) 所見

以上を整理すると、青木家所蔵龍笛譜は、紙幅から実用譜と考えられ、曲目が判明したものは10曲分である。それらは、いずれも現在まで引き継がれている曲目である。

現行の雅楽譜と比べると、本龍笛譜は現行譜に記載される唱歌がなく、曲題の下に拍子がかかれている。馬淵卯三郎氏によると、江戸時代の17世紀後半以降に、唱歌併記譜となり、曲題の下に記載される拍子も消滅することが指摘されている (馬淵1997)。

したがって、中世以前と江戸期以降の楽譜は記譜方法が大きく異なることから、その判別は比較的容易で、本龍笛譜は、近世より古いものと考えてよい。

朱点については、現行譜では、譜字の右側にあ

る朱点 (大) は太鼓を打つ箇所を、朱点 (小) は小拍子を示し、この龍笛譜も同様であると考えられるが、「赤白桃李花」「喜春楽」「品玄」の黄鐘調3曲には、譜面において、譜字の両側にも朱印が記されており、只拍子もしくは楽拍子を示したもの、譜字間中央にある朱点はプレスないしフリーズを示すと考えられる。この只拍子と楽拍子を譜の両側に記す例としては、南都伯系の譜である『菅眼集』新羅陵王破がある。

続いて、譜字の右側に記載される音価に関する記号について見ていくと、「由」については現行譜にも見られる表記で、指で次孔を一旦塞いで、また元に戻す手である。一方、現行譜では用いられない「リ」「火」の表記が、本龍笛譜にはあり、これらは古譜に広く用いられるが、近世譜のように、その数が大きく減少していない。このような装飾音の多寡は、鎌倉時代までは、楽人の個人差が大きいものと思われ、室町時代にかけて次第に記譜様式が整っていったものと考えられる。

一方、本龍笛譜の書法は、『懷中譜』 (嘉保2 [1095])、『註大家龍笛要録譜』 (正和5 [1316]) などの京都方楽家、大神家諸笛譜の書法に近く、特に、前田育徳会尊経閣が所蔵する『註大神家龍笛要録譜』 (7巻7冊) 正平八 (1353) 年大江基写の書法に近い印象を受けるものである。

そこで、大神家諸笛譜に記載される曲の中に、本龍笛譜に記載する曲が含まれるか検討したところ、『懷中譜』には、黄鐘調「品玄」「喜春楽」「赤白桃李花」、盤渉調「蘇合香」の4曲のみ、『龍笛譜 (基政笛譜)』には、黄鐘調「喜春楽」「赤白桃李花」、盤渉調「蘇合香」の3曲のみ記載されていたが、『註大神龍笛要録譜』の巻四～六には、本龍笛譜の全曲が記載されている。そして、『註大神龍笛要録譜』の装飾音に関する記号として「連」や「動」が用いられるが、本龍笛譜には、その記号が消滅していることが分かる。

今のところ、大神家諸笛譜と譜字や記譜方式の厳密な比較を行っていないため、断定はできないものの、これまでの検討により、青木家所蔵龍笛は、鎌倉時代～室町時代に属する可能性が高いと考えられる。室町時代の遺例は極端に少なく、現段階では、鎌倉時代と室町時代の判別は困難であるが、総合的に室町時代に近いものと推測される。

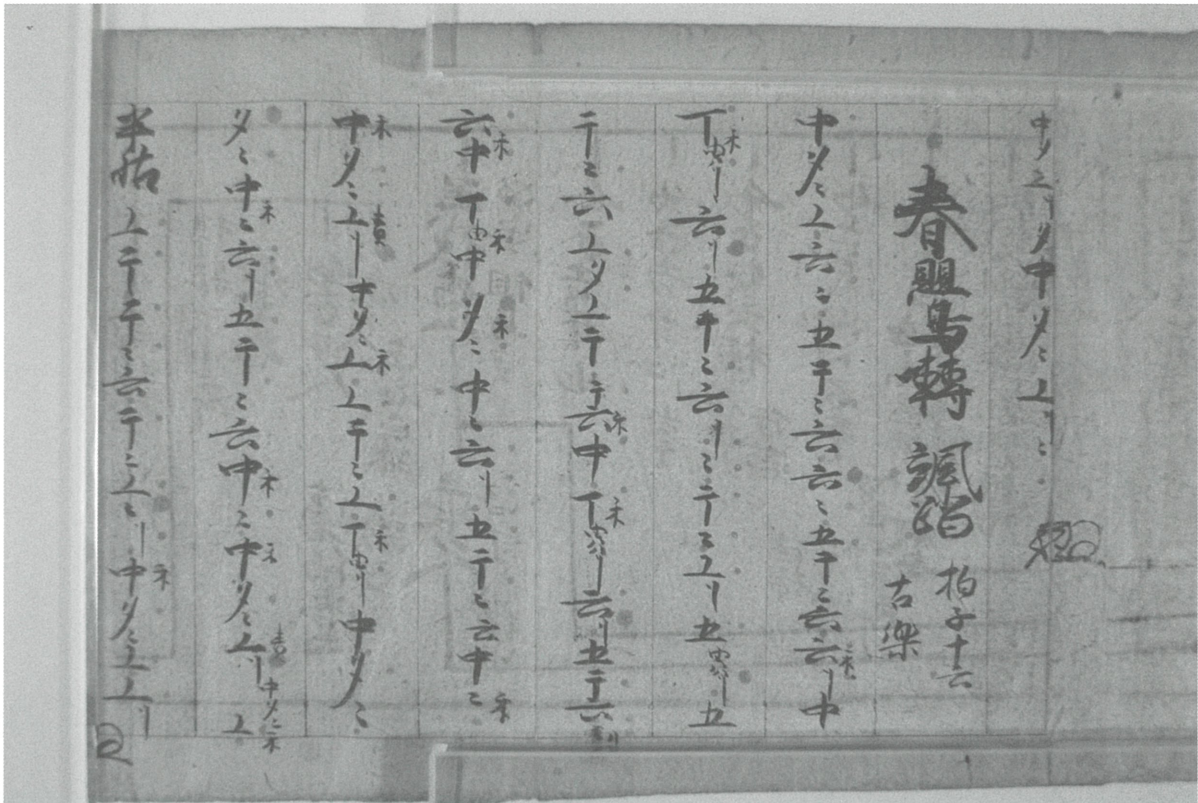


写真4 賀殿急、春鶯囀颯踏（曲目1、2）

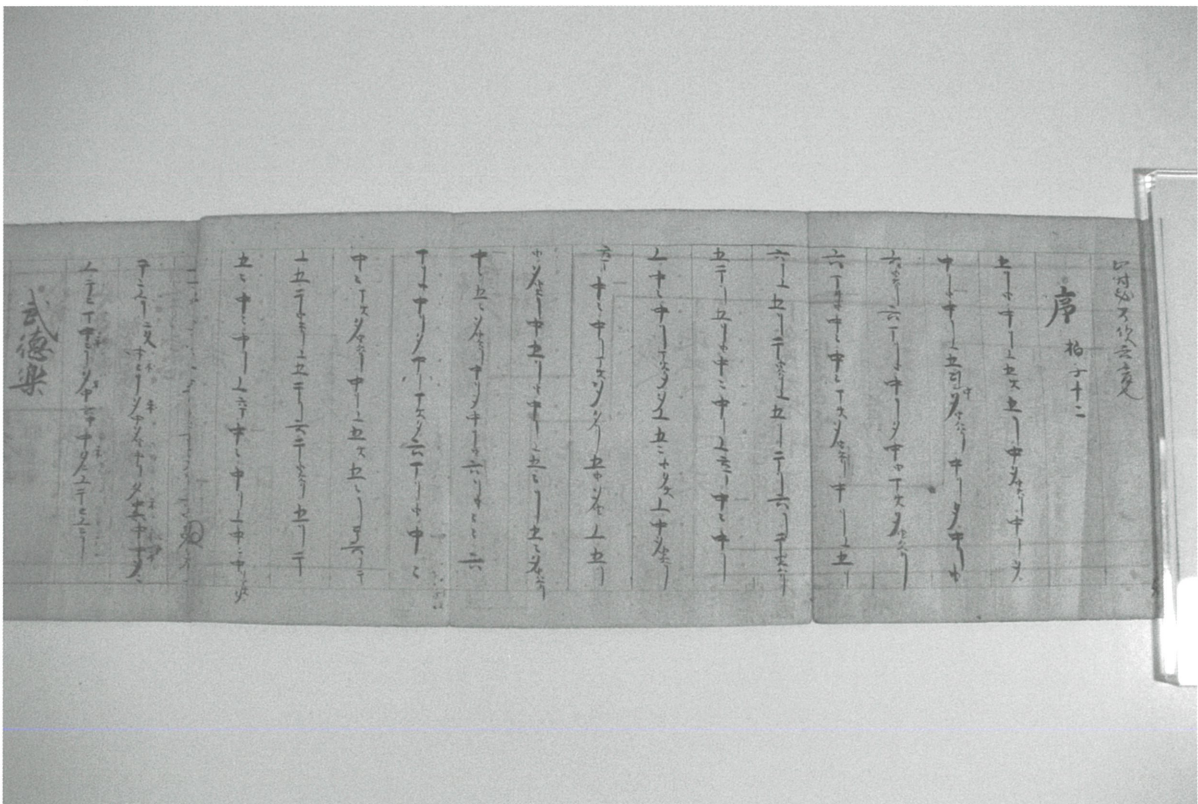


写真5 蘇合香序、酒胡子（曲目3、4）

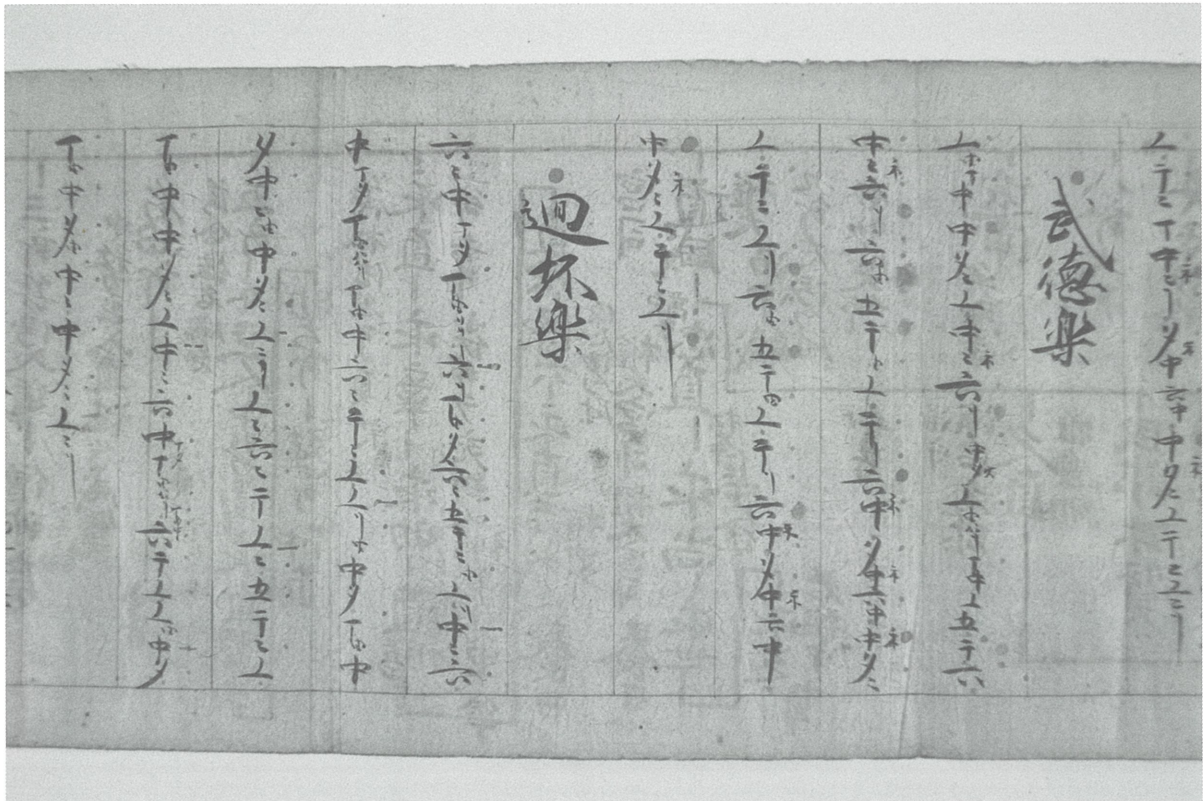


写真6 武徳樂、廻杯樂（曲目5、6）

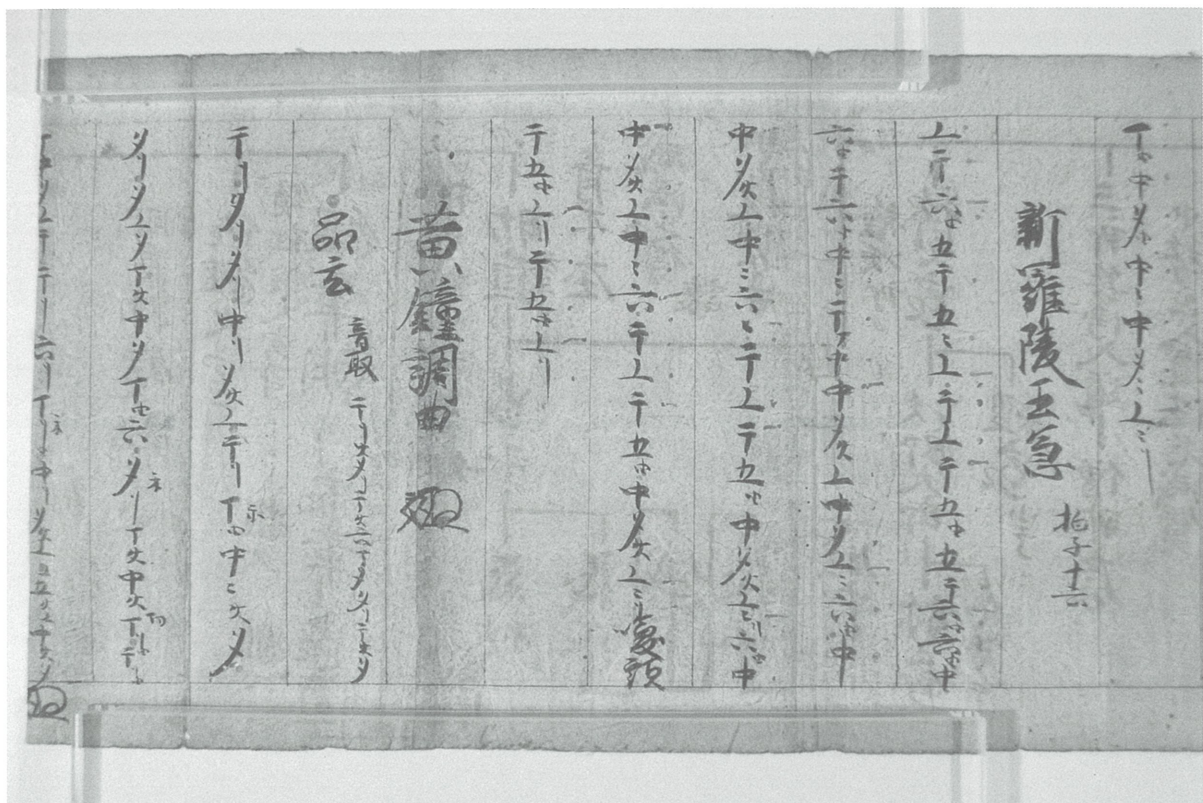


写真7 新羅陵王急、品玄（曲目7、8）

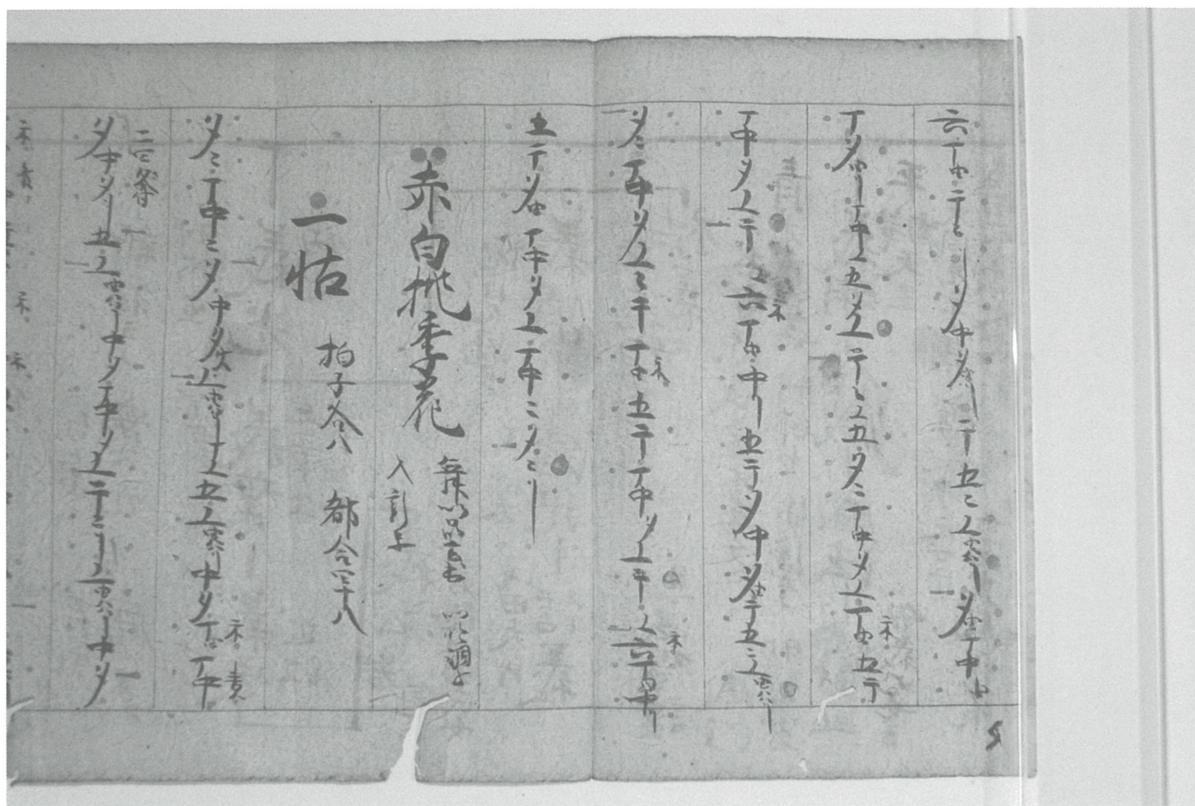


写真8 喜春楽 (曲目9)

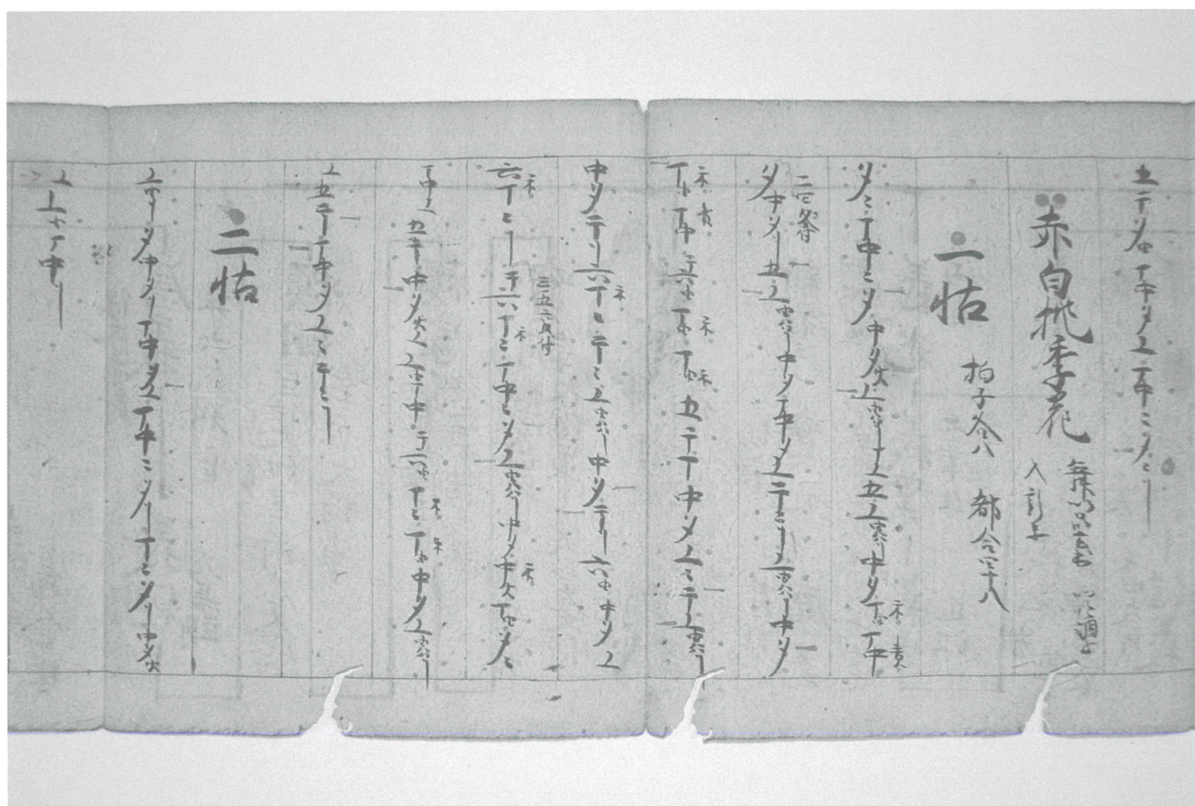


写真9 赤白桃李花 1～2帖 (曲目10)

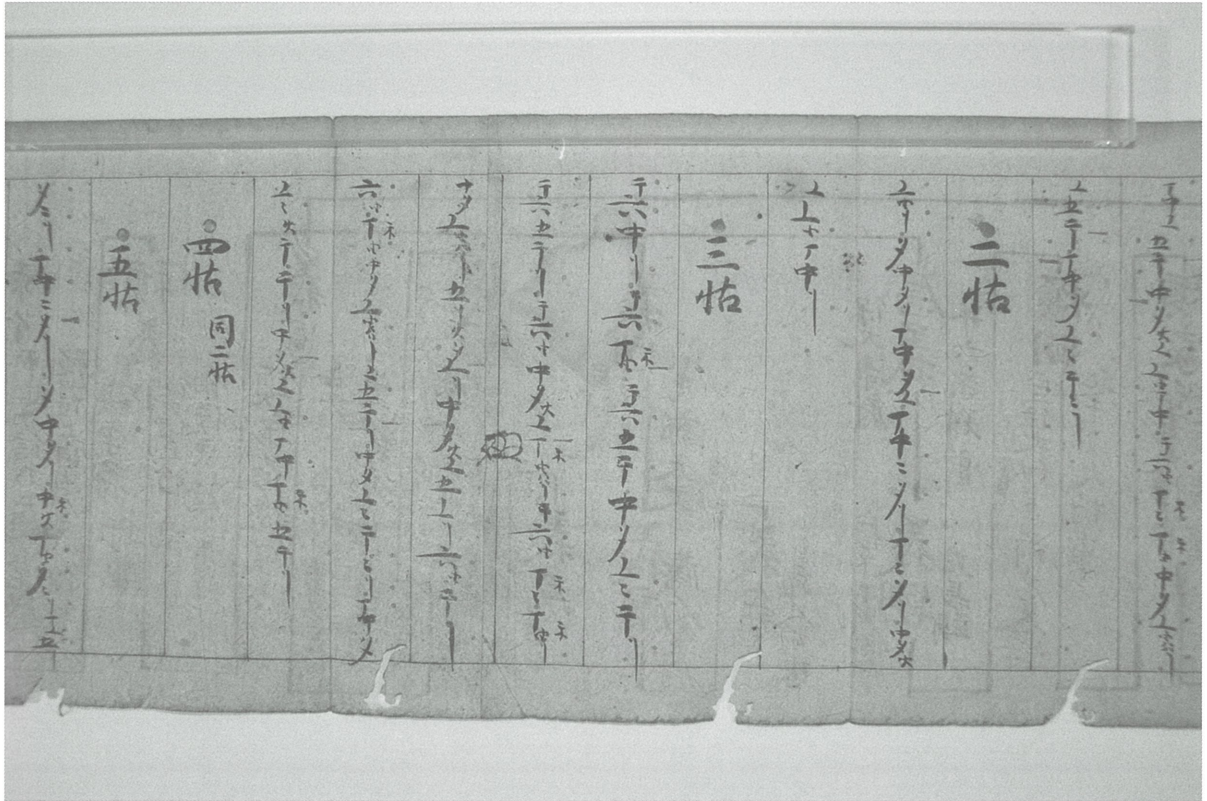


写真10 赤白桃李花2～4帖 (曲目10)

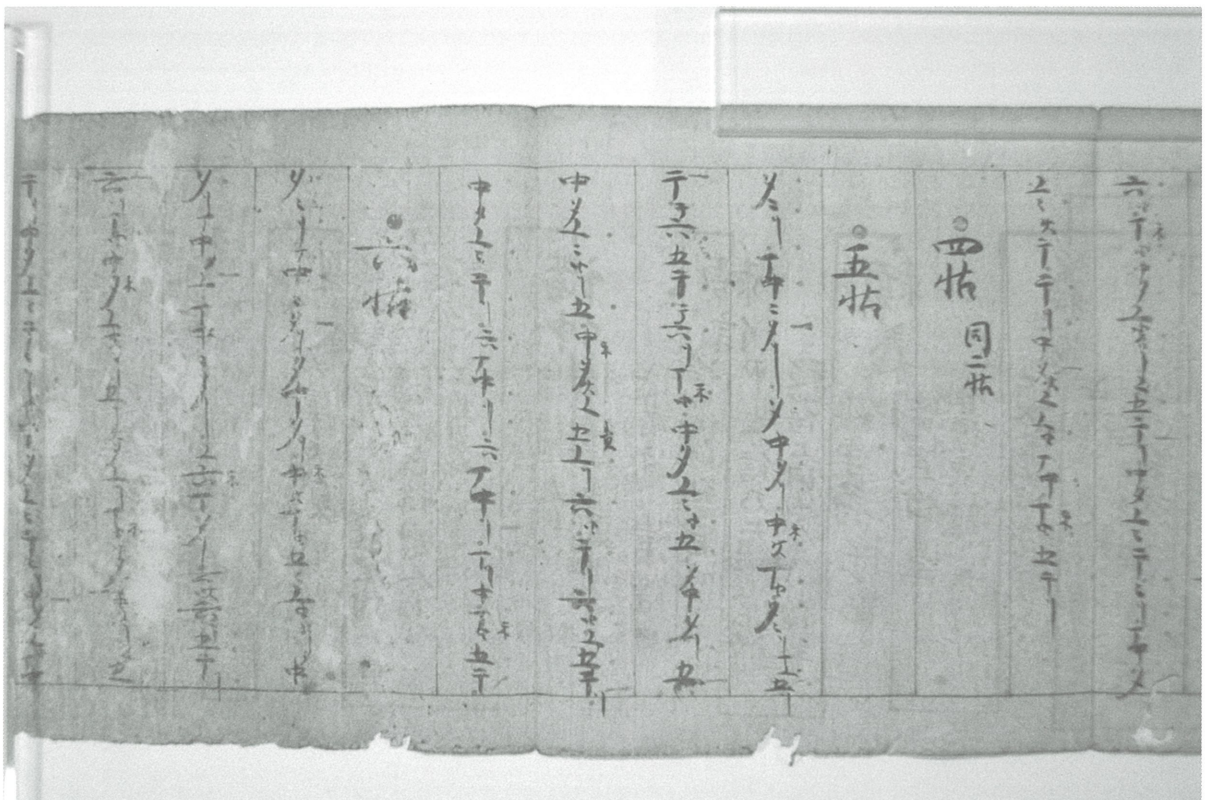


写真11 赤白桃李花4～6帖 (曲目10)

4. 北部九州における雅楽について

平安時代に体系化された雅楽は、平安時代中ごろ～中世にかけて、吉備津神社や厳島神社など地方に広がりを見せるが、宮中だけではなく、寺院の法会と密接に結び付くようになっている。特に顕教における供養会や迎講などでは、盛大に雅楽曲が奏され、記録として残るが、密教法会においても雅楽が奏されており、鎌倉時代には、天台宗比叡山の「七仏薬事法」において、舞を伴わずに奏楽されていることから、神社だけではなく、仏教寺院においても盛んに奏されていることが分かる（廣瀬2009、鳥谷部2012）。

一方、北部九州において雅楽の実態は、不明な部分が多いものの、雅楽が奏されたことを示す文書や伝承が残る。

中世以降に書かれた『教訓抄』や『筑紫楽伝統系』には、寛平九年（897年）に、彦山の八龍寺に音楽に秀でた唐人達が来て、奏樂したが、命婦の石川色子がそれを学び、その箏曲を宇多天皇に奉ったことが記されている。石川色子の存在は、『続日本後紀』によって立証されるが、年代的に石川色子と宇多天皇を結びつけるのは難しく、残念ながら、大友宗麟による焼き討ちで中世文書は焼失しているので、その真偽については定かではない（宮崎2003）。

平安期の資料としては、『拾遺往生伝』に記載があり、延久年間（1069～1074年）、筑前安楽寺天満宮の大法師である頼暹が、来迎に関する楽曲を制作し、毎月15日に伶人5、6人を招いて往生講を修したことが記されている。このことから、大宰府において、平安後期からすでに専属の樂人がいることが分かり、この時期に、北部九州においても雅楽が多く奏されていたことは想像に難くない。ただし、この資料からは、楽曲の製作が、作詞のみを行って既存の雅楽にのせたのか、独自の雅楽曲を作曲していたのかははっきりしない。

鎌倉～室町時代においても、このような管弦雅楽は継続して行われており、『彦山流記』には、建保元年（1213年）彦山の阿弥陀堂での管弦往生講が行われていることや『多聞院日記』には永禄八年（1565年）に青海波が奏楽されたことが記されている。このように、中世の北部九州においても、中央と同じように仏教寺院などで雅楽が

奏されており、室町時代に天台宗寺院である一貴山夷巍寺において、本龍笛譜に基づく演奏が行われていてもおかしくないと考える。

さて、北部九州においては、福岡県久留米市善導寺を中心とする筑紫楽が有名であり、この寺の僧である賢順は、筑紫箏の始祖であるとされる。善導寺は、浄土宗鎮西派の大本山で、坊頭36坊を有する大規模寺院であり、筑後草野氏との関係性が深い寺である。

『正定寺由緒録』には、弘長二年（1262年）に、正定寺が僧を善導寺に派遣して、声明や管弦を習得させたことが記されており、鎌倉時代に、善導寺で雅楽が奏されたことが分かるが、南北朝および応仁の乱、戦国期の度重なる戦乱により、寺院としては幾度も焼失と復興を繰り返している。このため、現在ではその伝承は途絶えており、雅楽が断絶なく継承されたかについては疑問が呈され、江戸期に筑紫楽として奏された雅楽は、1600年代に復活したものと考えられている（宮崎2003）。

そして、これとは別に、肥前には筑紫古伝の雅楽があったとされるが、当時の筑紫楽の内容や、伝承期間などは現時点では不明であり、存在を立証するのは困難とされている（宮崎2003）。

このように、筑紫地方において、中世に演奏された雅楽の実態が不明であるため、京都の雅楽とどのように異なるのかも分からないのが現状であるといえる。これは、北部九州において、一級資料である雅楽譜そのものの発見例が少ないことや彦山や善導寺のように中世以降の戦乱によって、中世文書や雅楽譜が消失していることが影響していると見られ、本龍笛譜のように中世の雅楽譜が残存することは希少な例と言える。

5. 糸島地域と雅楽について

龍笛譜の紙表となる系図、およびその他の青木家文書については、既に概要が紹介されているため、詳細については、別途参照していただきたいが、青木家に残る寄進状や起請文、系図等から、肥前鏡社と関係の深い草野氏と、青木氏および一貴山夷巍寺に関連があったことがうかがえ、一貴山夷巍寺と鏡社は互いに密接な関係にあったと想定されている。このことから、雅楽が鏡社からもたらされた可能性も考えられるが、現状ではそれ

を立証することは困難である。

また、寂光坊青木家が所蔵する龍笛譜は、京都方楽家である大神家諸笛譜の書法に近い印象を受ける龍笛譜であるが、一貴山夷巍寺、鏡社と京都楽人とを直接的に結びつける物的証拠はないのが現状である。しかし、中世における雅楽の広がりを考慮すると、一貴山夷巍寺を含め、糸島地域の寺院において、雅楽が奏されたとしても不思議ではない。

本資料は、寺院雅楽や筑紫楽を含め、中世筑紫地方における雅楽の実態やその伝習における書伝性を裏付ける資料として重要であり、今後も雅楽資料の調査が必要である。

6. おわりに

イギリスのローレンス・ピッケン氏は、現行の雅楽の中に大陸的、歌謡的な旋律が含まれていることに気づき、現行譜での拍のとり方を変えたことで、全く趣の異なる雅楽を復元した。仮に本龍笛譜で奏でる雅楽が、私たちが想像している雅楽とは大きく異なるものであるならば、大変興味深いところである。今回発見された龍笛譜が、こうした研究や筑紫地方における雅楽の実態を解明する一助となれば幸いである。

なお、今回の調査を通じて、福岡県内において、他にも雅楽譜があることが分かり、現在その調査を進めているところである（第1表）。

【参考文献】

- 末吉武史 2008 「第七章什宝—金剛力士（仁王）像」『夷巍寺八坊と天台大師講』二丈町民俗文化財調査報告書第6集
遠藤徹 1996 『大神流龍笛譜考』日本音楽史研究第1号
上野学園日本音楽室
鳥谷部輝彦 2012 「天台密教の安鎮法における奏舞奏楽」『日本宗教文化史研究』第16巻1号
廣瀬千晃 2009 「真言密教と芸能」『真言密教を探る』大正大学出版社
馬淵卯三郎 1998 「17世紀音楽様式論序説（1）所謂「雅楽」の場合（i）」『芸術』（21）,101-109 大阪芸術大学
桃崎祐輔 2008 「第六章 福岡県糸島郡二丈町一貴山夷巍寺無量院の中近世石造物—一貴山夷巍寺無量院の概要」『夷巍寺八坊と天台大師講』二丈町民俗文化財調査報告書第6集
宮崎まゆみ 2003 『筑紫箏音楽史の研究』同成社

保管	文書名	史料	曲名	調	拍子	楽器	年代
糸島市	青木家 文書	1	1 賀殿急	双調		龍笛	室町時代
			2 春鶯囀風路	双調	拍子十六	龍笛	
			3 蘇合香序	盤涉調	拍子十二	龍笛	
			4 酒胡子	双調	拍子十二	龍笛	
			5 武徳楽	双調	拍子十	龍笛	
			6 迴杯楽	双調	拍子十六	龍笛	
			7 新羅陵王急	双調	拍子十六	龍笛	
			8 品玄	黄鐘調		龍笛	
			9 喜春楽	黄鐘調	拍子七	龍笛	
			10 赤白桃李花	黄鐘調	各拍子八	龍笛	
福岡市	今林 文書	2	1			簫、箏	江戸時代 後期～末
			2 武徳楽		早四拍子	簫、箏	
			3 香取	平調		簫、箏	
			4 萬歳楽	平調	延八拍子	簫、箏	
			5 三臺急	平調	早四拍子	簫、箏	
			6 五常楽	平調	早八拍子	簫、箏	
			7 皇靈急	平調	早四拍子	簫、箏	
			8 慶徳	平調		簫、箏	
			9 合歡塩	大食調	早塩	簫、箏	
			10 抜頭	大食調	早塩	簫、箏	
			11 長慶子	大食調		簫、箏	
			12 青海波	盤涉調	早塩	簫、箏	
			13 越天楽			簫、箏	
小都市	高松(準) 家文書 (2次)	3	1 催馬楽 席田				江戸時代 初期～中期
			2			羯鼓	
			3 五常楽	平調		鳳笛	
			4 越殿楽			鳳笛	
			5 景徳			鳳笛	
			6 老君子		早四拍子、拍子十六	龍笛、箏	
			7 皇靈急		早四拍子、拍子二十	龍笛、箏	
			8 臨河		早八拍子、拍子十一	龍笛、箏	
			9 長慶子		早四拍子、拍子十六	龍笛、箏	
			10 夜半楽		早八拍子、拍子十六	龍笛、箏	
			11 座人三臺		早四拍子、拍子十六	龍笛、箏	
			12 傾盆楽急		早四拍子、拍子十六	龍笛、箏	
			13 仙遊露		早八拍子、拍子十	龍笛、箏	
			14 陪膳		早只拍子、拍子十二	龍笛、箏	
			15 五常楽急		早八拍子、拍子八	龍笛、箏	
			16 長慶子		早四拍子、拍子十	龍笛、箏	
			17 抜頭前半			龍笛、箏	
			18 王昭君		早四拍子、拍子十	龍笛、箏	
			19 甘州			龍笛、箏	
			20 越殿楽		拍子の標記なし	箏	
			21 三臺塩		早四拍子、拍子十六	龍笛、箏	
			22 「運城楽」?		早只拍子、拍子十六	龍笛、箏	
			23 合歡塩		早四拍子、拍子二十	龍笛、箏	
			24 輪鼓擲脱	大食調	只拍子、拍子二十三	龍笛、箏	
			25 輪臺		早八拍子、拍子十六	龍笛、箏	
			26 越殿楽		早四拍子、拍子十二	龍笛、箏	
			27 竹林楽		早八拍子、拍子十	龍笛、箏	
			28 青海波		早八拍子、拍子十二	龍笛、箏	
			29 白柱		早八拍子、拍子九	龍笛、箏	
			30 千秋楽		早八拍子、拍子八	龍笛、箏	
			31 抜頭後半			龍笛、箏	
			32 裏頭楽		延八拍子、拍子十二	龍笛、箏	
			33 柳花苑		只拍子、拍子二十四		
			34 催馬楽				
福岡市	堀野文書	4	1 越天楽 抜頭				江戸時代 後期 ～明治初期
			2 龍留府				
			3 越天楽				
			4 胡飲酒				
			5 無題				
福岡県	木下禾 大資料	5	1 越天楽等				明治時代か
福岡県	鷹尾家 文書	6	1			龍笛	大正六年
			2 越天楽	平調		扇外流 龍笛	
			3 五常楽	平調		扇外流 龍笛	
			4 酒胡子	苅越調		扇外流 龍笛	
			5 合歡塩	大食調		扇外流 龍笛	
			6 賀殿急	苅越調		扇外流 龍笛	
			7 越天楽、太平楽				
			8 雅楽集初編				
福岡県	源辺家 文書	7	1 催馬楽				明治16年 2月17日
			2 催馬楽、朗詠				
福岡県	日吉神 社文書	8	1 神楽歌、催馬楽				明治27年 3月15日
福岡県	源辺家 文書	7	1 催馬楽				明治12年
			2 催馬楽、朗詠				
福岡県	日吉神 社文書	8	1 神楽歌、催馬楽				江戸時代

第1表 福岡県内雅楽譜一覧表（平成26年3月時点）